

若い人が何人も参加し、子育て支援などで注文 上教大で市議会主催で「市民のご意見を聴く会」

上越市議会主催の「市民のご意見を聴く会」が5、6、7日と開催されました。私は6日、上越教育大学が会場の会に出かけてきました。



参加者は15人ほどで、残念ながら、学生さんは少なかったです。でも子育て中の女性など若い人が何人も参加してくれて、話が弾みました。

参加者からは、「慣らし保育を3月頃からできないか」「(就労の有無や理由を問わず未就園児を預けられる)誰でも通園制度はどうなっているか」「通年観光もいいが、まず身近な生活を守るための予算の充実を」「介護事業者が次々とつぶれかねない状況だ。市としても(実態を)見ていただきたい」「災害が発生した時、いまの町内会の力では要支援者を福祉避難所に運べないケースも出てくる。どうすべきか」「総選挙では、政治とカネだけでなく、教育のことも話してもらいたかった」などの声が寄せられました。これらの要望は議会で対応を検討します。

ドキュメンタリー映画、「掘る女」に大きな関心

3日、松本貴子監督のドキュメンタリー映画、「掘る女」を観て、同監督と津南町の「なじょもん」学芸員、佐藤雅一さんのトークを聴きました。遺跡発掘での「掘る」人たちに焦点を当てたドキュメンタリー映画は初めてみました。作業にあたっている人の7割以上が女性だとか。びっくりしました。

寝そべって「何か」を丁寧に掘っている人、釣り手土器を見つけて喜ぶ人など現場での様子だけでなく、掘る人の通常の生活も映画には入っていて、とても気持ちのいいドキュメントでした。

トークでは、「うずまき大好き人間が縄文土器のなかの極



上の「うずまき、にひかれた」「掘ったものをどう表現するか。縄文と芸術の交差の仕事をしている」「縄文時代はいくらかのいさかいはあったが、1万4000年にわたり戦争はしていない。武器の概念もない」などの言葉が心に残りました。



コウノトリの巣の修復作業が本格化しています。5日、撮影しました。



吉川芸能発表会初参加

「シニアコーラス佐保姫」のみなさん



【センナリホオズキ】

ナス科の1年草。漢字で「千成鬼灯」と書きます。昔はわが家の畑にもたくさんありました。小粒ながらも甘みがあり、兄弟で競争して食べたものです。この実とは10年ほど前、大島区板山で再び出会いました。感激でした。通常は7~9月に薄黄色の花を咲かせます。花言葉は「自然美」「不思議」「半信半疑」です。写真は10月29日、吉川区竹直にて撮影しました。

はしづめ法一の 活動レポート

No.2179 2024.11.10

発行編集 日本共産党上越市議 橋爪のりかず

Tel 025-548-3628

通じないときは 090-5392-1961

E-mail hasiznyg_0808@yahoo.co.jp

URL <https://www.hose1.jp/>



ブログ
「ホーセの見
てある記」は
← こちら

橋爪法一

検索

春よ来い

第八二六回

愛猫逝く

いつかはやってくると思っている、自分の家で飼っていた動物が亡くなると切ないですね。一〇月二十二日の夕方、わが家のネコ(愛称は「よう」)が静かに息を引き取りました。

わが家の「よう」は二〇年前、昨年二月に死んだ「はる」(わが家で飼っていたメス猫の愛称)とともに長女が飼いはじめた赤と白の毛のオス猫です。体は大きく、歩く姿はじつに堂々としていました。毛並みもよく、なでてやりたくなる美しさがありました。

猫とは言え、二〇年間も一緒に暮らしていると、完全にわが家族の一員です。私は市役所などから帰って来た時、猫がどうしているかいつも気になりました。「よう、どこにいますか」「そう言って階段の下から声をかけたときに、「にゃーん」と言って二階の廊下の手すりのところで私に向かって鳴いてくれる。それだけで、ほっとするんですから、やはり家族ですね。

人間が心配するのと同じように猫も人間の家族を心配してくれます。二年前に母が亡くなったときがそうでした。母の葬儀が終わって数日後のことです。「よう」は戸が開いているときに、座敷に入っていきます。その姿を見た私は、「よう、ばあちゃんに声掛けてやんない」と言いました。わかったかどうかは判断できませんでしたが、間違いなく座敷の床の間の方角に向かって歩いていきました。そこには母の遺骨と遺影がありました。

「よう」は、母であつたと私であつと、なかなか、なでさせてくれませんでした。それでいながら、「よう」は母がいなくなっても、母の部屋の戸が開いていると入っていききました。長年にわたり、部屋には母がいて、「いいいこしてやると。来(き)ない」と声をかけてもらったことをしっかりと記憶していたのかも知れません。

忘れられないのは、夕飯時の「よう」の行動です。わが家は居間で夕飯を食べていますが、そこへほぼ毎日、「よう」はやってきました。目的は牛乳です。もっと具体的に言うと、牛乳を温めてカップに入れた時、表面にできる「膜(まく)」がほしいのです。これが特別のお気に入り入りで、小皿に入れてやると、喜んで食べていました。

二階から居間に下りてきた時、「よう」はもう一つ行動しました。廊下歩きです。居間から座敷に入り、座敷から廊下に出て、ぐるりと一周するのがほぼ日課になっていました。「よう」が廊下を歩いている様子は居間から見えます。たいがい一回だけなのですが、二周することもありました。廊下を歩いている「よう」の姿は、人間の赤ちゃんが得意げに歩くところに似ているなと思いました。「がんばれ、がんばれ」と言うと、ずっと歩き続けるかも知れない雰囲気がありました。

その「よう」も、進む老齢化には勝てませんでした。亡くなる二十日くらい前から急激に体力が低下していきました。夕飯時に二階から下りてきても、帰りの階段を自力で上がれなくなりました。廊下歩きも回り切れず、途中でバタンと倒れてしまうようにもなりました。それでいながら「よう」は、私達の家族に認めてもらいたいと思ったのでしょうか、いつもの行動をしようとして必死で努力していました。その姿を見ると、いじらしく感じられました。

振り返ってみると、「よう」は二〇年、よく頑張ってくれたと思います。家族と共に生き、家族のことを心配してくれました。「よう」の誕生日は一〇月の何日かまではわかりませんが、月末までに二十歳になることは確かでした。先月下旬、「よう」に感謝し、誕生日祝いをしました。天国では、また母に、「いいいこしてやると」と声をかけられるのを期待しています。

青空の下、元気市など大盛況

3日は最高の晴れでした。大島区のふれあい館の中や外ではきらきらフェスティバルやげんき市、農業祭、商工祭などが同時開催されました。大島区の全人口の半分くらい集まったと錯覚するほどの賑わいでした。晴れの天気で、食べ物がある。楽しいこともある。そして建物の中は芸術の秋。最高のイベントとなりました。

イラストはカレーとキノコ汁を販売した人たち。



ものづくりコーナーが人気



2日、3日は市内各地で文化祭、作品展などが行われました。

どこでも人気は参加型のイベントです。紙粘土を使った本物そっくりの食品づくり、押し花できれいな定規づくり(イラスト)などの体験コーナーは大人気でした。

ニュースフラッシュ

上越地域各消防署における空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	10月30日(水)	11月6日(水)
上越消防署	0.050	0.053
上越南消防署	0.043	0.043
新井消防署	0.053	0.047
頸北消防署	0.057	0.050
頸南消防署	0.067	0.060
東頸消防署	0.047	0.040
名立分遣所	0.057	0.053
高士分遣所	0.053	0.050

春よ来い

第八二六回

愛猫逝く

いつかはやってくると思っている、自分の家で飼っていた動物が亡くなると切ないですね。一〇月二十二日の夕方、わが家のネコ（愛称は「よう」）が静かに息を引き取りました。

わが家の「よう」は二〇年前、昨年二月に死んだ「はる」（わが家で飼っていたメス猫の愛称）とともに長女が飼いはじめた赤と白の毛のオス猫です。体は大きく、歩く姿はじつに堂々としていました。毛並みもよく、なでてやりたくなる美しさがありました。

猫とは言え、二〇年間も一緒に暮らしていると、完全にわが家族の一員です。私は市役所などから帰って来た時、猫がどうしているかいつも気になりました。「よう、どこにいるんだ」そう言って階段の下から声をかけたときに、「にゃーん」と言って二階の廊下の手すりのところで私に向かって鳴いてくれる。それだけで、ほっとするんですから、やはり家族ですね。

人間が心配するのと同じように猫も人間の家族を心配してくれます。二年前に母が亡くなったときがそうでした。母の葬儀が終わって数日後のことです。「よう」は戸が開いているときに、座敷に入っいきましました。その姿を見た私は、「よう、ばあちゃんに声掛けてやんない」と言いました。わかったかどうかは判断できませんでしたが、間違いなく座敷の床の方角に向かって歩いていきました。そこには母の遺骨と遺影がありました。

「よう」は、母であつと私であつと、なかなか、なでさせてくれませんでした。それでいながら、「よう」は母がいなくなっても、母の部屋の戸が開いていると入っていきました。長年にわたり、部屋には母がいて、「いいいこしてやると。来（き）ない」と声をかけてもらったことをしっかりと記憶していたのかも知れません。

忘れられないのは、夕飯時の「よう」の行動です。わが家は居間で夕飯を食べていますが、そこへほぼ毎日、「よう」はやってきました。目的は牛乳です。もっと具体的に言うと、牛乳を温めてカップに入れた時、表面にできる「膜（まく）」がほしいのです。これが特別のお気に入り、小皿に入れてやると、喜んで食べていました。

二階から居間に下りてきた時、「よう」はもう一つ行動しました。廊下歩きです。居間から座敷に入り、座敷から廊下に出て、ぐるりと一周するのがほぼ日課になっていました。「よう」が廊下を歩いている様子は居間から見えます。たいがい一回だけなのですが、一周することもありました。廊下を歩いている「よう」の姿は、人間の赤ちゃんが得意げに歩くところに似ているなと思いました。「がんばれ、がんばれ」と言うと、ずっと歩き続けるかも知れない雰囲気がありました。

その「よう」も、進む老齢化には勝てませんでした。亡くなる二十日くらい前から急激に体力が低下していきました。夕飯時に二階から下りてきても、帰りの階段を自力で上がれなくなりました。廊下歩きも回り切れず、途中でバタンと倒れてしまうようにもなりました。それでいながら「よう」は、私達の家族に認めてもらいたいと思ったのでしょうか、いつもの行動をしようと思死で努力していました。その姿を見ると、いじらしく感じられました。

振り返ってみると、「よう」は二〇年、よく頑張った生きたと思います。家族と共に生き、家族のことを心配してくれました。「よう」の誕生日は一〇月の何日かまではわかりませんが、月末までに二十歳になることは確かでした。先月下旬、「よう」に感謝し、誕生日祝いをしました。天国では、また母に、「いいいこしてやると」と声をかけられるのを期待しています。

青空の下、元気市など大盛況

3日は最高の晴れでした。大島区のふれあい館の中や外ではきらきらフェスティバルやげんき市、農業祭、商工祭などが同時開催されました。大島区の全人口の半分くらい集まったと錯覚するほどの賑わいでした。晴れの天気、食べ物がある、楽しいこと、そして建物の中は芸術の秋、最高のイベントとなりました。

今年は大島区でのイベントになかなか参加できずにいたのですが、ようやく叶いました。念願だったキノコ汁を食べることができましたし、会いたかった人たちと何人も会うことができました。屋内では、野鳥の写真にくぎ付けとなりました。バッタをつくった作品にも惹かれました。

上のイラストは園児の作品を観る親子連れ。下はカレーライスとキノコ汁を販売した人たちです。



ニュースフラッシュ

上越地域各消防署における空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	10月30日(水)	11月6日(水)
上越消防署	0.050	0.053
上越南消防署	0.043	0.043
新井消防署	0.053	0.047
頸北消防署	0.057	0.050
頸南消防署	0.067	0.060
東頸消防署	0.047	0.040
名立分遣所	0.057	0.053
高士分遣所	0.053	0.050

いつかはやってくると思っている、自分の家で飼っていた動物が亡くなると切ないですね。一〇月二十二日の夕方、わが家のネコ（愛称は「よう」）が静かに息を引き取りました。

わが家の「よう」は二〇年前、昨年二月に死んだ「はる」（わが家で飼っていたメス猫の愛称）とともに長女が飼いはじめた赤と白の毛のオス猫です。体は大きく、歩く姿はじつに堂々としていました。毛並みもよく、なでてやりたくなる美しさがありました。

猫とは言え、二〇年間も一緒に暮らしていると、完全にわが家族の一員です。私は市役所などから帰って来た時、猫がどうしているかいつも気になりました。「よう、どこにいるんだ」そう言って階段の下から声をかけたときに、「にゃーん」と言って二階の廊下の手すりのところで私に向かって鳴いてくれる。それだけで、ほっとするんですから、やはり家族ですね。

人間が心配するのと同じように猫も人間の家族を心配してくれます。二年前に母が亡くなったときがそうでした。母の葬儀が終わって数日後のことです。「よう」は戸が開いているときに、座敷に入っただけで、その姿を見た私は、「よう、ばあちゃんに声掛けてやんない」と言いました。わかったかどうかは判断できませんでしたが、間違いなく座敷の床の方角に向かって歩いていきました。そこには母の遺骨と遺影がありました。

「よう」は、母であつたと私であつと、なかなか、なでさせてくれませんでした。それでいながら、「よう」は母がいなくなっても、母の部屋の戸が開いていると入っていきました。長年にわたり、部屋には母がいて、「いいいこしてやると。来（き）ない」と声をかけてもらったことをしっかりと記憶していたのかも知れません。

忘れられないのは、夕飯時の「よう」の行動です。わが家は居間で夕飯を食べていますが、そこへほぼ毎日、「よう」はやってきました。目的は牛乳です。もっと具体的に言うと、牛乳を温めてカップに入れた時、表面にできる「膜（まく）」がほしいのです。これが特別のお気に入り入りで、小皿に入れてやると、喜んで食べていました。

二階から居間に下りてきた時、「よう」はもう一つ行動しました。廊下歩きです。居間から座敷に入り、座敷から廊下に出て、ぐるりと一周するのがほぼ日課になっていました。「よう」が廊下を歩いている様子は居間から見えます。たいがい一回だけなのですが、二周することもありました。廊下を歩いている「よう」の姿は、人間の赤ちゃんが得意げに歩くところに似ているなと思いました。「がんばれ、がんばれ」と言うと、ずっと歩き続けるかも知れない雰囲気がありました。

その「よう」も、進む老齢化には勝てませんでした。亡くなる二十日くらい前から急激に体力が低下していきました。夕飯時に二階から下りてきても、帰りの階段を自力で上がれなくなりました。廊下歩きも回り切れず、途中でボタンと倒れてしまうようにもなりました。それでいながら「よう」は、私達の家族に認めてもらいたいと思ったのでしょうか、いつもの行動をしようと思死で努力していました。その姿を見ると、いじらしく感じられました。

振り返ってみると、「よう」は二〇年、よく頑張って生きたと思います。家族と共に生き、家族のことを心配してくれました。「よう」の誕生日は一〇月の何日かまではわかりませんが、月末までに二十歳になることは確かでした。先月下旬、「よう」に感謝し、誕生日祝いをしました。天国では、また母に、「いいいこしてやると」と声をかけられるんじゃないでしょうか。

生涯学習フェス、手作業の作品作りが人気

2日、3日、吉川区ではコミュニティプラザ、保健センターで生涯学習フェスティバルがあり、芸能発表会、絵画、写真、押し花などの作品展示、手作業による作品づくり体験などが行われました。

人気だったのは紙粘土を使った食品づくりと押し花体験です。どちらも大勢の子どもたちが参加し、賑やかでした。紙粘土を使った作品は形も色も本物そっくりで、お菓子などは間違っただけで口に入れそうになるほどリアルでした。押し花を使ったきれいな定規づくりの体験コーナーも人気が、1日目は材料が足りなくなりました。

私も初めて作品を出させてもらいました。コウノトリの記録写真70枚です。この記録を見ようと、三和区、安塚区などからも駆けつけてくださる人たちがあ



た。また、地元で3年間、コウノトリの観察を続けている小学3年生が親と共に見に来て、季節的には冬場に一番多くコウノトリを見かけるなど貴重な情報を寄せられました。感謝です。

ニュースフラッシュ

上越地域各消防署における空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	10月30日(水)	11月6日(水)
上越消防署	0.050	0.053
上越南消防署	0.043	0.043
新井消防署	0.053	0.047
頸北消防署	0.057	0.050
頸南消防署	0.067	0.060
東頸消防署	0.047	0.040
名立分遣所	0.057	0.053
高士分遣所	0.053	0.050